

神長倉論の補填

馬 場 宏 二

これは、前稿「探索・神長倉真民」¹⁾の欠落部分を補填するための一文である。

前稿では、ジャーナリストで歴史家である神長倉真民の略歴をほぼ明らかにした。極めて魅力的な文筆家でありながら、伝記皆無なばかりか人名辞典にも出てこない人物のことだから、散在する断片的な資料を見付け出し、掻き集めて構成するしかなかった。根拠や資料に決定的な欠如や疑点が多々あるのを、さまざまな手法でともかく埋めた。当然、命題ごとに確実性に大差が残るが、それでも一通りの経歴は示し得たものと思う。

しかしその中でも、割にすぐ埋められそうに見えた欠陥がいくつか残っていた。中でも、ジャーナリストとしての出発点と、失明によって執筆能力を失う時期における経緯がそれであった。前稿に示唆しておいた通り、専ら資料の所在による制約があったせいである。雑誌『ニコニコ』創刊の明治44年の諸号と、雑誌『経済マガジン』の、昭和14年以降の諸号が、検索した限りでは東京周辺の図書館に所蔵されていなかった。前稿執筆時の体力では、両誌を探して閲読吸収するのは無理だったので、間を置いて所在探索からやり直すことにした。

幸い両誌とも大阪に所蔵されていた。『ニコニコ』は関西大学、『経済マガジン』は大阪市立大学。もっとも、前者は国会図書館が一応所蔵しているが、マイクロ版しか貸してくれず、そのマイクロ版は出来上がり不鮮明で読めない箇所が多い。問題は神長倉真民の執筆状況だから、現物を見ればおよその見当がつくのだが、現物は頑固に貸さない。そのことが判ってから、筆者地元の北浦和図書館で、岩崎・松本両司書を煩わせて利用手続きをした上で、本年4月に上記二大学の図書館を訪れた。

I. ジャーナリスト時代の端緒

前稿に纏めたとおり、神長倉真民がジャーナリスト生活に入ったのは、明治42（1909）年に日銀を辞めてからである。その後、雑誌を三つほど転々とし、途中数年間母校早稲田実業学校の幹事を勤め、そこを辞めて短期間政治活動に従事した後に大正13（1924）年に『ダイヤモンド』に入社し、昭和13（1938）年6月まで同誌に在籍した。およそ30年に亘るジャーナリスト生活である。

ところが実はその端緒が判らない。三つほどの資料を対照すると、日銀を辞めて翌年結婚した

ことになる。やがて『ニコニコ』で雑誌記者生活に入るのだが、同誌が創刊されたのは結婚の翌年である。わざわざ無職になったところで結婚したのか？しかも前稿執筆時点では『ニコニコ』創刊年の諸号は見られなかった。そこで、『ニコニコ』入社の際緯が何か判るかと思って大阪くんだりまで出かけたわけだが、結論的には、この点では何も判らなかった。勿論関西大学は快く文献を取り分けておいてくれたのだが、記述がないのである。

『ニコニコ』の創刊号は明治44年2月号である。翌45年分から後の号は東京大学明治文庫がかなり持っており、そこに神長倉真民筆の記事をともかく見出し得る。ところが折角見に行ったのに、明治44年の諸号には神長倉真民筆の記事が全くない。それどころか、9月号の奥付けに「ニコニコくらぶ幹部役員」の名が一覧で出て来るのだが、会頭牧野元二郎、常務理事松永敏太郎、記者溝辺水城、記者池内萃録どまりで、神長倉真民の名はない。あるいは神長倉は、幹部扱いされない下っ端記者だったのだろうか。無論、巻末の社内報的な欄にも、彼の名はない。

下っ端記者だったと考えてもよさそうである。『ニコニコ』3月号に「一記者」担当の、鳩山春子の談話が出ている。鳩山春子は、神長倉真民が大正7年に創刊した『婦人家庭雑誌』の常連執筆者になる。3月号の「一記者」が神長倉真民で、明治44年に既に人脈が出来ていたと考えることもできる。

また、『ニコニコ』7月号に、「一記者」が頭山満にインタビューした記事があり、その中で「一記者」の方が、「二流新聞ならたいがい入れてくれますが、マア足を洗ってニコニコをやっています」と己を語っている。これが神長倉だとすれば、彼が日銀を辞めてしばらくは職探しをしていたことを物語る。

しかしいずれにせよ、『ニコニコ』明治44年分から得られた情報はこの程度である。それが明治45年になると、2月の一周年記念号に、「神生」の筆名で、池内萃緑・桑門情兮両記者の結婚を報ずる記事が載っている。これは文体からして神長倉の筆と考えて良い。その翌年の大正2年8月号には神長倉真民の本名で「故林董伯爵を悼む」が出る。だからこの間、徒弟的訓練期間を経て、しだいに本名で書ける地位にまで出世したとの解釈も出来る。だがそれでも、神長倉筆とすぐ判る記事は極めて少ない。バックナンバーが揃っていないためによけい少なく見えるが、揃ったとしてもそうは増え得ない。無論、全く別の筆名で書かれた雑記事の中に神長倉真民筆かと疑わせるものもあるが、こちらは可能性だけで、断定するのは無理である。だから、せっかく『ニコニコ』という、多分当時としては大手の雑誌に入りながら、筆力旺盛な神長倉としては不完全燃焼状態が続いたと考えて良い。数年後に神長倉は自前で『義勇青年』を創刊した。

II. 記者生活の終り

神長倉真民は、大正13年11月から昭和13（1938）年6月まで『ダイヤモンド』に勤めた。そのことは翌年刊の『新興コンツェルン物語』奥付の、明らかに自分で書いたと判る著者紹介文にある。そしてまた、『ダイヤモンド』誌で見る限り、神長倉真民筆を明示した文章は昭和12年で終

わっている。神長倉生の名で「維新経済秘史」を書いて来た。その終り頃の主題が「太政官札物語」であるが、その最終が同年8月11日号掲載の「再び金相場を禁止す」で、これは最後の著書『明治維新財政経済史考』の終末部の内容に該当する。神長倉生の筆名の記事はまだ続くが、今度は「戦争と外交」と主題を変えて11月11日号まで出る。ところが神長倉はこれで擱筆した訳ではない。『ダイヤモンド』誌は昭和13年4月に理研コンツエルン論を3回、5月に日曹論を1回載せた。これらは無署名だが、資料集めに助手役くらいは使ったとしても神長倉筆であろう。『経済マガジン』昭和13年の諸号に林慎之助の名で6回連載した新興コンツエルン論を集めて、昭和14年4月刊の神長倉真民著『新興コンツエルン物語』にするが、『ダイヤモンド』の上記の記事はそこへ資料として吸収されていると見られる。そうなら昭和13年5月11日号の日曹論が『ダイヤモンド』誌へ神長倉が寄稿した最後になる。

だがここで注意すべきは、ダイヤモンド社が昭和12年6月に『経済マガジン』誌を創刊し、神長倉真民はそこに、石山賢吉や野崎龍七と並んで書いていることである。時局迎合雑誌の趣がないでもないが、大物記者の寄稿先が旬刊誌から月刊誌へ移動した、配転のようなものだと考えられなくもない。事実、ダイヤモンド社『二十五年史』には、『経済マガジン』の創刊は載っているが、神長倉真民の退職は書いてない。それでも彼の『新興コンツエルン物語』は、ダイヤモンド文庫の一冊に含まれている。

さて『経済マガジン』で神長倉真民はどの程度書いか。彼がこのころから失明によって筆力を低下させて行ったことは疑いないが、何時どの程度書けなくなったかを判断するには、関わった最後の雑誌での執筆状況を見ておく必要がある。

そこで大阪市立大学へ出掛け、あらかじめ手続きしておいたのにとんだ行違いがあつて、友人松島正博教授に思わぬ御厄介をかけたが、ともかく必要部分は閲読できた。結論を先に述べれば、昭和13年一杯までの執筆は、以前と大差はない。後半やや減り気味だったと見える程度である。が、14年になると筆力低下は明白になる。そして昭和15（1940）年、神長倉真民の名は、全く誌上に現れなくなる。因に彼は昭和18（1943）年6月、『明治維新財政経済史考』の序文を書いた。これが公表された最後の文章である。それは同年12月に世に出るが、神長倉真民は同年7月に亡くなっていた。

『経済マガジン』への執筆ぶりを、もう少し細かく見ておく。昭和12年8月から「銭屋五兵衛」を3回、「日本資本主義由来」を6回と、毎号連載する。その間、昭和13年1月に「経済史上の唐人お吉」を載せたが、これは一年前に『ダイヤモンド』に「経済史上に於ける唐人お吉」の題で4回連載した文章を下敷きにした書き直しである。銭屋五兵衛は貿易史、唐人お吉は対ドル貨幣換算に関わる話題だから、いずれも幕末経済史である。「日本資本主義由来」は、攘夷に固まっていた薩摩藩が生麦事件や薩英戦争を経て急速に対英接近し資本主義化してゆく過程の叙述である。他に怪外人モンブランについても書いている。これらは、神長倉が芋作名で「維新経済史抜読」を『ダイヤモンド』誌に長期連載した挙げ句それを整理して、著書『仏蘭西公使ロセスと小栗上野介』にした後も、なお幕末維新史の発掘に関心を持ち続けていたことの現れである。但し、

お吉や五兵衛や薩摩の資本主義化を本に纏める体力は、もはや神長倉には残されていなかった。以上は前稿で触れていないことなので、この際特記しておく。

実はそれと別に、この雑誌に「経済萬華噺」という名の、珍しい一口噺を連ねた物識り欄があり、その話題の多彩さ、珍しさや文体から見て、おそらく当初は神長倉筆だろうと推測出来るが、断定まではできない。また、昭和12年から13年初めにかけて、緑林散人の名で3回、鹿林散人の名で2回、財界名明暗録が出ている。文体が多少異なる感じが無いでもないが、これを主題の差による音調の差だとして無視すれば、これらの紛らわしい署名の連載記事も神長倉筆だった可能性がある。と言うのは、紛らわしい署名のもう一つである桜州山人は神長倉真民と認定してよく、また、財界明暗録が終わった直後から、林慎之助つまり神長倉の、新興コンツエルン論の連載が始まるからである。

昭和13年5月から林慎之助名の新興コンツエルン論が6回続く。林慎之助が神長倉であることは間違いない。『経済マガジン』のこの連載は、父が子に語る手紙と言う形をそのままにして、神長倉真民著『新興コンツエルン物語』になっているからである。ただし、日産（満業）論に直接該当する記事は雑誌に見当たらないから、これは書き足したのであろう。緑林散人名の「日産満州移住・真相の真相」がその準備になったであろうが、本に含めるにはこれだけでは足りない。神長倉真民は、一度書いた文をそのまま転載することはまず行わず、文型を変えるか資料をつけ食えるか、いずれにしろ相当手を加える。その中では『新興コンツエルン物語』は旧稿を多分にそのまま活かしており、それは視力低下からやむをえずそうしたのであろうが、そこでもなお、日産一つ分は書き加えたのである。『ダイヤモンド』に載せた日曹論、理研論は、この著書の資料的部分に吸収されていると言って良い。

さてこの間、彼は神長倉生の名で別に4回書いている。主題は経済史だったり時の話題だったりして特に纏まっていない。他に桜州山人の名で3回書いた。これは内容・文体から見て明らかに神長倉真民の筆である。一つは13年2月号の「高橋是清を売った男」。2・26事件直後から『ダイヤモンド』に「高橋蔵相を売った男」の題で4回連載した記事を、素材はほぼ同じままで構成を大幅に書き替えた。露骨に書いてはいないが神長倉の無念さが伝わる。もう一つは13年3月号の「維新秘史 西郷大参謀紛失」で、これは芋作名で『ダイヤモンド』に書いていたころからのネタにその後の考察を加えたものだが、珍しく結論を出さず、後の資料発掘に期待すると謙虚に結んでいる。最後が13年4月の「史実より見た江戸開城談判の真相」で、ここでは、かつて自らも唱え、後に蜷川新を批判する中で新資料提示の形で否定した、西郷が江戸を焼かなかったのは勝海舟に説得されたからと言うより英公使パークスが制約したからだと言うパークス干渉説に、事実上戻っている²⁾。

昭和12年の内は『ダイヤモンド』と兼ねながら毎号書いていた。13年も前半はそのテンポで、号に2本も3本も書いている。後半に『ダイヤモンド』を退いてからも『経済マガジン』にほぼ月に2本書いていたが、10月に新興コンツエルン論の連載が終わったあたりから筆力がやや落ちたのであろうか。年末にかけては執筆数も減り、迫力ある議論ではなくなっている。これが翌14

年になると、新興コンツェルン論を本にした他は、経済マガジンへの登場が、ほとんど隔月に1本程度に落ちる。

『経済マガジン』昭和14年の1月号には林慎之助の名で「経済界はどう変わりつつあるか」、以後神長倉真民の名で、2月「果して実現可能か 英・米の対日経済包囲」、5月「肥り行く独逸」、8月「事変下のわが産業」、10月「米国は参戦するか」11月「戦争と科学日本」、そして最後が12月「輸出の新しき資源」。

傷ましいと思う。神長倉が他の文筆家同様時代を読み違えたことは明らかである。無論、あの言論統制のもとだから明白な時局批判など書けっこないが、僅かな問題点の指摘は含めたにしても、根本的には、日本が暴走の挙げ句バカな戦争に突入したことが見えておらず、自ら時流に乗せられてしまっている。これは当時活躍した文筆家に一様に共通するであろう。だから勝ち目に繋がる要素だけを拾い続け、結果的には戦意高揚の一助となった。その勝ち目の一要素として、アメリカの中立主義を過大評価していた。おそらく能率論以来知米派のつもりでおり、一回り冷静な判断をして見せたのだろう。アメリカを知ったつもりでいながらその本質を読めない点では、現在に至る日本の知識人層と同断である。そしてそれ以上に、戦勝ナショナリズムに踊ってしまったために、日本の軍事的暴走が掴めていない。

だがもっと傷ましいのは、あれだけの筆力の持ち主だった神長倉が、54歳の年に、せいぜい隔月でしか書けなくなったことである。しかも最終の文章は、漁業が輸出品目になるであろうという。主題はピンぼけで材料文体とも神長倉らしからぬ非力なものである。多分彼には、新しく材料を揃える馬力も読者を煙に巻く文体を振り回す腕力も無くなっていたのである。書ける機会があるから、手持ちの材料で、全力を振り絞って書いた。これがジャーナリスト神長倉真民の最後の文だった。思想家ではなくとも快腕の文筆家だった。この終焉は心情的に傷ましい。

小括；以上の検討の結果、神長倉真民の略歴のうち、日銀辞職から『ニコニコ』入社までの経緯を知る手掛かりは当面見出せそうにないことが判った。逆に彼が筆力を失う、昭和12（1937）年から昭和14（1939）年に関わる部分については、ある程度具体的に掴めた。前稿は本稿の記述に即した訂正を要する。特に年譜の該当箇所にはご留意いただきたい。

なお、今回の資料探索に触発されて、これ以外の論点で取り上げる手掛かりを得たものもある。以下のごとくである。

Ⅲ. 大阪と神長倉真民

前稿では明示してないが伏在した問題である。大阪への探索旅行の中で意識に上って来た。今回探索した雑誌はいずれも大阪で所蔵されていた。同様に大阪にしか存在しない神長倉真民の著書『事務能率の研究』があった。この点に触れておくことは、神長倉を捉える視角の副次的ながら無視できない一つとして意味があるであろう。

神長倉真民の著書は計12冊あるが、ほとんどは実見した。できなかったのは国会図書館所蔵の

『サイエンティフィックマネージメントの研究』で、マイクロ化したものしか貸してくれない。著者探索なのでマイクロ版だけでなく原本を見たいのだが、その辺が窓口ではなかなか理解して貰えない。もう一つ実見してないのが上記『事務能率の研究』で、これは国会図書館も東大図書館も持っていない。北浦和図書館で探索してもらったところ、所蔵しているのは大阪府立中央図書館だけである。だが「事務能率の研究」という文章は、『職工問題資料』誌に分載されているらしい。そこで、大原社会問題研究所所蔵の『職工問題資料』を図書館間利用で借り出してもらい、該当部分を閲読した。その上で大阪府立中央図書館にお願いして原本を手元においてもらい、細目次を電話で照合して見た。全く一致するから、同じ原稿を著書と雑誌双方に利用したものと思われる。

そこでこうなる。当時の神長倉真民は、大正12（1923）年3月に早稲田実業学校幹事を辞職して武藤山治の実業同志会の政治運動加わり、翌大正13年5月の総選挙に生地青森で立候補して惨敗した後、文筆業に戻って大日本能率増進研究所長と名乗り、専ら能率論を書いていた。実際、彼は1923年中に能率論の本を4冊著わした。その一つがこの『事務能率の研究』である。能率論は早稲田実業学校幹事になる前、『日本一』の編集主任を勤めていたころから関心があり、それを拓めるのは日本経済発展のための社会的義務だと考えていたふしがあるから、既に知識の蓄積があったのである。彼は経歴上、工場の能率以上に事務所の能率に関心があった。『事務能率の研究』はそれを系統的に、かつ明快巧妙に語った記録であり、自ら執筆したものではないが名著の内に入る。版元は大阪市商工課。当時国内でも労使紛争の多かった大阪で、行政が地元企業へのサービスとして企画し、大日本能率研究所長と名乗る人物を東京から講演に招いたのであろう。そしてその原稿、おそらく速記録を、宇野利右衛門主催の工業教育会が、会誌に転用したのである。大阪市と工業教育会が如何なる協力関係にあったかは判らない。しかしともかく、一方が本として出版し、もう一方が同じものを会誌に分載した。

本になったものが、現在大阪市だけに存在する。不思議な因縁である。神長倉真民の能率論は、東京では全くウケなかったらしい。彼がいち早く紹介したレフティングウエルの事務所管理論さえ、神長倉真民の名とともに全く忘れられた。大阪でもさほど大きく語り伝えられていたわけではなかろうが、多分問題の比重はこの地の方が大きかった。おそらくそのせいで、ここ講演の地最大の公共図書館に、国会図書館さえ持たない著作が所蔵されている。ただし、この書を実見する日程は今回の旅行には含め得なかった。

IV. 神長倉真民と経営史学

これも大阪旅行の成果である。大阪大学の阿部武司・沢井実両教授と、神長倉真民について語る機会があった。旧知の仲であり、共通の関心事は経営史学である。この領域では最も知識に乏しいが、神長倉真民については詳しくなっていた筆者が、彼の経営史学への貢献が三点はあることに気付いた。商社の起源、能率論、新興コンツェルン論である。『財界巡礼記』の日本綿業論

をこれに加えても良いかも知れない。もともと神長倉最大の業績は幕末維新論であり、つまり彼は何を置いても歴史家として捉えられると考えていた。今回はそれと並んで、経営史家として捉えられることに気付いたのである。

従ってその中では、商社論における貢献が際立って大きい。神長倉は、その著『明治産業発生史』に含めた「コンパニー由来論」で、『川勝家文書』の中から、慶応元（1865）年八月付けの「組合商法之儀に付御内慮奉伺候書付」を見付け出し、そこに勘定奉行小栗上野介がフランス公使ロッシュから日仏貿易独占のための共同商社設立の提案を受けたことが明示されている点に初めて照明を当てたのである。当時の学界歴史家たちが気付かぬ着眼であった。

商社設立と言えば、慶応三（1867）年四月の、「兵庫開港に付商社取建方並御用金見込の議申上候書付」という、これも勘定奉行連名の文書が有名で、日本における商社＝会社概念の発端だと解され易い。しかもそこに「商社西名コンペニー」とあるところから、「商社」は小栗上野介が「コンペニー」を訳した語だなどという誤りが常識化している³⁾。正しくは萬延元（1860～61）年中の、長崎奉行岡部駿河守の、長崎奉行所財政再建提案が「商社」の初出で、貿易商社の意味。これが幕末に急速に拡散して、幕府内外で周知になるとともに、共同出資の営利企業一般つまり今日の「会社」の意味になって行った⁴⁾。慶応年間には、小栗ら勘定奉行は当然それを識っていて使ったものと思われる。厄介なことに、同じ萬延元年、小栗を含む遣米使節団が世界一周をしたが、その際小栗がアメリカから会社概念を得て来たとする、物的証拠が全くない説が一旦学説化⁵⁾し、これが今日でも小栗シンパあるいは小栗利用派から流され続けるために、商社会社小栗起源説が疑われもせぬに流通しているが、商社の語源はオランダ語の *Handelmaatschappij* で長崎発、実行上の具体的な構想は、神長倉の発見通り5年後のフランスの提案が発端である。これは幕末600萬ドル借款と関わり、幕府も積極的に進めようとしたが、イギリスやオランダの反対等各種の制約があって実現しなかった。これに比べると、周知の「兵庫開港につき云々」の文書の方は、商社設立より、それによって兵庫開港資金を調達することの方が主眼で、ともかく兵庫商社は出来たが、当然商人達は積極的ではなかった。

神長倉は語原論までは取り上げてないが、以上の見え難い大筋を的確明瞭に掴んでいた。その眼目が「組合商法之儀 云々」の文書の発見だった。実は筆者もほぼ同じ筋書きに到達していた⁶⁾が、語原論に集中していたのと、神長倉に気付かぬままに学界歴史家の業績に依拠していたために、この文書の意義が掴み切れなかった。神長倉は数十年前にそれを明確にしていた。今日学界は彼の功績を正当に評価し直すべきである。

第二の能率論。神長倉はテーラー説の早期の導入者、レフリングウェル説の先駆的導入者と評して良い。しかも単に外来学説を紹介したに留まらず、日本の現実と突き合わせようと試みていた。かような一般論として見れば、神長倉真民はそうとう高く評価されてよいはずである。ところがこの面でも彼の名は全く残らず、彼が紹介したレフリングウェルの名も、日本の学界に定着せず、大勢が飛びついたテーラーのみが有名になった。何故なのか。日本経営学史の問題として詰めてみる必要がある。

第三の新興コンツエレン論。『新興コンツエレン物語』は鮮やかという他はない。父が社会現象に関心をもつ年頃になった息子の質問—多分実際にそうしたことがあったのであろう、それに大いに張り切って答えた手紙の形で—財閥とコンツエレンの異同に始まって、日曹、森、日窒、日産（満業）、理研各コンツエレンの共通性と個別性を、親しみ易い口調で明快に説く。化学、電力関連、精密機械等の、日本としては新産業を基盤としながら、相互関連の深い企業群を形成したことが示されるが、同時にそれが軍事経済化や戦争や海外侵略と関わって発展したことを、素直に日本の発展として説いている。ここまでは経済史として常識化しているであろうが、これだけの紙幅でこれだけ細部を生き活きと説いたものは少ないのではなかろうか。新興コンツエレン論はいくつか出ているから、その中で先駆的だとか本格的とかは言えまいが、特に創立者達に一流の技術者が多く、しかも彼らが企業家精神を持ち合わせていて、そこには国家目的に沿うことも含み、新分野や新技術や、時に株式操作にも手を出すことで難時を切り抜けつつ全体の発展を導いたことを説いているあたりは、そのまま全面的に承服出来るか否かはともかく、明示的な企業者論になっており、日本経営史への刺激になるところがかなりあると見て良い。

V. 残された問題

神長倉真民の経歴探索のなかで、今一つ釈然としない部分がある。彼は恩師天野為之の追悼文を書いていない。少なくとも「大成」「至誠」『天野先生追悼記念号』⁷⁾には書いてない。因に天野為之追悼文を連載した『東洋経済新報』⁸⁾にも神長倉の文はない。まだ旺盛に執筆を続けていた時期だから、書けなかったわけではなかろう。彼と天野為之との関係を考えると、何をおいても書くべきところだから、彼の名がないのが不思議なのである。

神長倉が早稲田実業学校の生徒だったころ天野は校長だった。際立ってよく出来た生徒であろう神長倉を、自らの恩師高橋是清日銀副総裁を説いて、私学出としては初めて日銀に入れた。因に後の政治家三木武吉も同じ私学出として入っているが、これも多分天野の推薦であろう。神長倉はその日銀を飛び出したのだが、それでも天野との交流が断絶したのではない。10年足らず後、二人は協力して『婦人家庭雑誌』を創刊した。現有の資料からだとも神長倉が発行人で主体、天野は毎号巻頭論文を書き、これまた高橋を通じて資金援助も図っているから、最有力な協力者を演じたことになるが、あるいは実質は逆で、天野の意向を実務経験ある神長倉が具体化したのかも知れない。天野が早稲田騒動で完全無職になっていた時期であり、それに彼はもともと経済学の低学歴層への普及には熱心だった。他方神長倉は雑誌『日本一』で編集主任から主筆に昇格して一年で、そう暇はなかったはずであり、実際新刊の『婦人家庭雑誌』には意外に少ししか書いていない。こちらはあるいは無理して恩師に付き合ったのかも知れない。

だがそれはともかく、両者の関係は極めて密接だった。しかも、同誌が創刊されて間も無い大正7（1918）年12月、天野は古巣の早稲田実業学校の校長に復帰したが、その際神長倉を引き抜いて、同校幹事に据えた。早稲田実業学校には明らかに早稲田騒動の余波があったから、神長倉

はそれを承知で天野の防御盾になったのかも知れず、着任後それを静めるのに二人は苦勞したはずである。授業妨害を止めないテコズリ学級を一旦退学処分にしたなどもその現れではなかったか⁹⁾。だが大正12(1923)年3月、神長倉は早稲田実業学校幹事を辞職し、武藤山治に従って政治運動に入る。おそらくそれまでに校内は落着いたのであろう。天野は校長として在職を続け、昭和13(1938)年2月、在職のまま亡くなる。

神長倉が早稲田実業幹事を辞めてから後、両者の間に如何なる交流があったかは、今のところ資料が全くない。天野の伝記¹⁰⁾はそれなりに良くできているのだが、原資料が焼けてしまっているせいもあって、神長倉との関係などはおよそ出てこない。年表から、神長倉幹事時代に教員の賃上げ要求がこじれて処分が出たことが判る程度である。他方神長倉の側は、昭和11(1936)年になって『ダイヤモンド』の回想記で、高橋是清、天野為之、芋作の関係を語り、そこで天野が日銀に入れてくれたことや、自分が創刊した婦人雑誌¹¹⁾に「師匠のA博士」が高橋を通じて援助してくれたことは語っている¹²⁾が、早実復職後の天野について語った文はまだ見出せない。

恩義があり、一時期は苦楽を共にした天野が亡くなった時、筆力豊かでまだ書き続けていた神長倉が、母校同窓会が編集する天野先生追悼記年号に書かず、そこに名さえ現れないのはいささか不思議である。そういえば同校の人物誌『百年を彩るひとびと』に全く取り上げられていないのも不思議だが、これはそもそも載せる手懸りが失われていたためかも知れない。

注

- 1) 馬場宏二『探索・神長倉真民』『経営論集』第13号、2007年2月
- 2) 神長倉は、『ダイヤモンド』昭和8年2月1日号の「明治維新史抜読み江戸城総攻撃の巻」では、勝の限界を言うために、パークス干渉説を支持以上に積極的に唱えていた。ところが同誌昭和10年3月1日号の「万華鏡6」では、蜷川新批判のために、木梨精一資料を渡辺清遺談より重視すべきだとして、干渉説を明確に否定した。今回の『経済マガジン』では、同じ渡辺清遺談から「素より西郷は、彼パークスの一件を心に承知しているから、…明日の攻撃は止めなければならぬといふ気を持って居った…」との箇所を肯定的に引用して攻撃中止に繋げている。これでは、蜷川をへこませる手段として木梨資料を見せびらかす都合上パークス干渉説を否定したことになる。この点では歴史家神長倉は信用し難い。
- 3) 『広辞苑』
- 4) 馬場宏二『会社という言葉』、大東文化大学経営研究所、研究叢書No20、2001年。
- 5) 蜷川新『維新前後の政争と小栗上野介の死』1928年日本書院、および菅野和太郎『日本会社企業発生史の研究』、1931年岩波書店、74ページ。
- 6) 馬場前掲『会社という言葉』
- 7) 早稲田実業学校 大成会・主誠会『天野先生追悼記年号』、昭和13年7月、三康図書館所蔵。これには石橋堪山、三浦鍊太郎ら東洋経済関係者、旧6回卒業生で日銀岡山支店長柳沢鉦一他計32人の寄稿があり、天野の略歴と校葬記も載っているが、神長倉真民の名はどこにもない。同様に、天野の女婿で次期校長になった浅川栄次郎の名も出てこない。なお本書は、早稲田実業学校大成会報『大成』第32号と同じものらしいが、この会報のバックナンバーは早稲田実業学校においてさえ揃っていない。

- 8) 『東洋経済新報』誌は昭和13年4月2日の「社論 本誌の育ての親天野為之博士の功業を追憶す」の後、5号に渡って三浦鏡太郎の追想を掲げているが、社外の人間に執筆させたわけではない。
- 9) 参照、前掲拙稿「探索・神長倉真民」、45ページ。
- 10) 浅川栄次郎・西田長寿著『天野為之』、1950年、実業之日本社。
- 11) 次註に挙げる随筆で、神長倉は「婦人雑誌」としか語っていない。岩波書店『近代日本総合年表』（第三刷）から、高橋蔵相時代では解からないから原内閣時代に創刊された婦人雑誌を探すと、『女性日本人』と『家庭婦人雑誌』が出てくるが、前者は三宅雪嶺夫妻の雑誌で、神長倉とは直接関係はない。後者はその名で探したのではどこにもなく、果たして発行されたか否かも判らない。探索援助を依頼した大東文化大学の前田昌子司書が、探しあぐねて、あるいは名称が逆で婦人家庭雑誌ではないか、と思いついてくれたので、それで探してもらったら、何のことはない、『女性日本人』同様、東京大学明治文庫に所蔵されていた。『近代日本総合年表』の誤記である。訂正してもらわねばまるまい。
- 12) 随筆「高橋蔵相と芋作」『ダイヤモンド』昭和11年1月21日。神長倉はこの後、「蔵相は御長命」を書き、皮肉にもその直後の2・26事件で高橋が殺されてからは、『高橋蔵相を売った男』を連載した。直接会ったことはないようだが、これが神長倉流の哀悼の意の表現だった。